

令和元年10月12日(土) 13時30分～

専修寺境内遺跡現地説明会資料

調査原因：宝物館建替

所在地：津市一身田町2819番

調査主体：津市教育委員会

調査期間：令和元年7月23日～10月25日(予定)

調査面積：約800㎡

1. はじめに

専修寺は志登茂川右岸の低地部に位置し、南を流れる毛無川は専修寺を含む寺内町を囲む環濠の一部となっています。

現在の専修寺の前身は、真宗高田派中興の祖真慧上人が伊勢地方の布教の拠点として、15世紀後半に、この地に無量寿院を建立してからのことです。専修寺は、現在の栃木県真岡市で建立された高田山専修寺がはじまりで、その後戦火にみまわれるなどして、やがて一身田が高田教団の中心となり専修寺と呼ばれるようになりました。

無量寿院の伽藍や境内域は不明な点が多く、天正8年(1580)に御堂を焼失し、再建後の正保2年(1645)にも伽藍のほとんどが焼失しています。その後、万治元年(1658)津藩二代藩主藤堂高次の四女が専修寺の門主に輿入れするにあたり、当時の専修寺の西側の土地が津藩藤堂家より寄進されたことによって、専修寺が約9万㎡の広大な境内地となりました。現在境内には国宝の御影堂・如来堂のほか11棟の重要文化財、さらに三重県指定史跡・名勝である専修寺庭園などたくさんの文化財が点在しています。

専修寺の境内では、平成8年から9年にかけて境内地の北西部で納骨堂の建設に伴い発掘調査が行われています。池の遺構と環濠から池に水を取り入れる導水施設が検出され、土師器や陶磁器のほか瓦塔の破片なども発見されています。

2. 調査の結果

今回の調査は、境内の北東部にある宝物館の建替え工事に伴うもので、専修寺境内遺跡としては2回目の本格的な調査となります。平成30年に事業地内で確認調査を行ったところ、調査坑から土師器皿などが出土したため、新しい宝物館が建てられる部分を発掘調査しました。調査は工程の都合上3地区に分けて行い、おもな遺構・遺物は最も広い2区から検出されました。

(1) 整地層

2区の南端部を精査したところ、瓦を大量に含む層が検出されました。層の厚さは約50cmで、それより下は無遺物の粘土層となっています。出土遺物は整理箱で60箱にものぼります。大半は瓦で、現在宝物館のある境内の北東部を整地する際に埋められたものと考えられます

(2) 焼土1

2区の東端で検出した長さ約4mの薄い焼土層で、土師器皿を多く含んでいました。このほか少数ながら土師器羽釜、肥前産の陶磁器、瓦などが出土しています。焼土は、ここで火災があったのか、それとも近接地から整地する際に運ばれてきたのか検討を要するところです。

(3) 焼土2

2区の北東隅で検出した薄い焼土層で、土師器皿のほか古銭がまとまって出土しています。判読できるものはわずかですが、寛永通宝のほかに中国銭もあります。

(4) 小穴

2区の東部を中心に検出されましたが、建物としてまとまるものはありません。

(5) 出土遺物

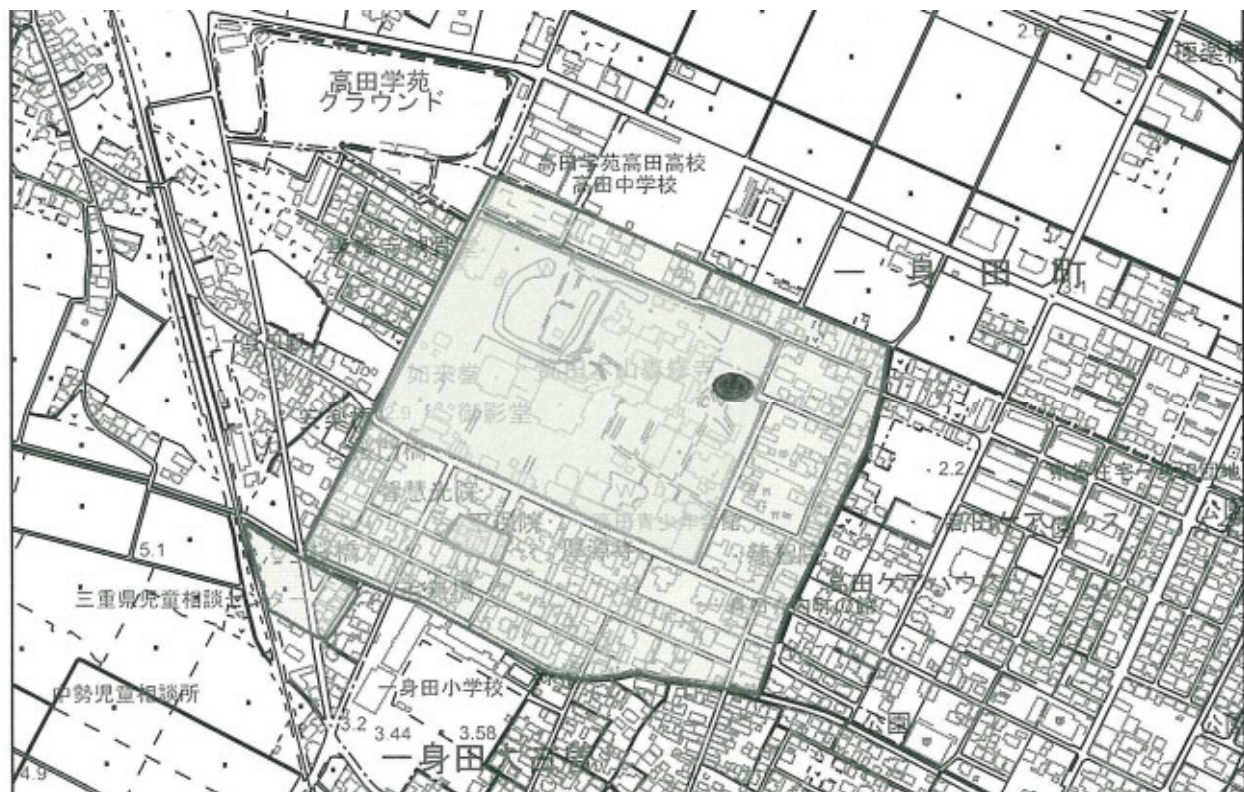
大半が2区の整地層から出土した瓦です。製作技法や文様から17世紀代のものと考えられています。瓦当部が残る瓦は少量ですが、軒丸瓦は巴文の巻方向が右で珠文16のものが主体で、巴文の巻方向が左のものは1点のみです。

3. まとめ

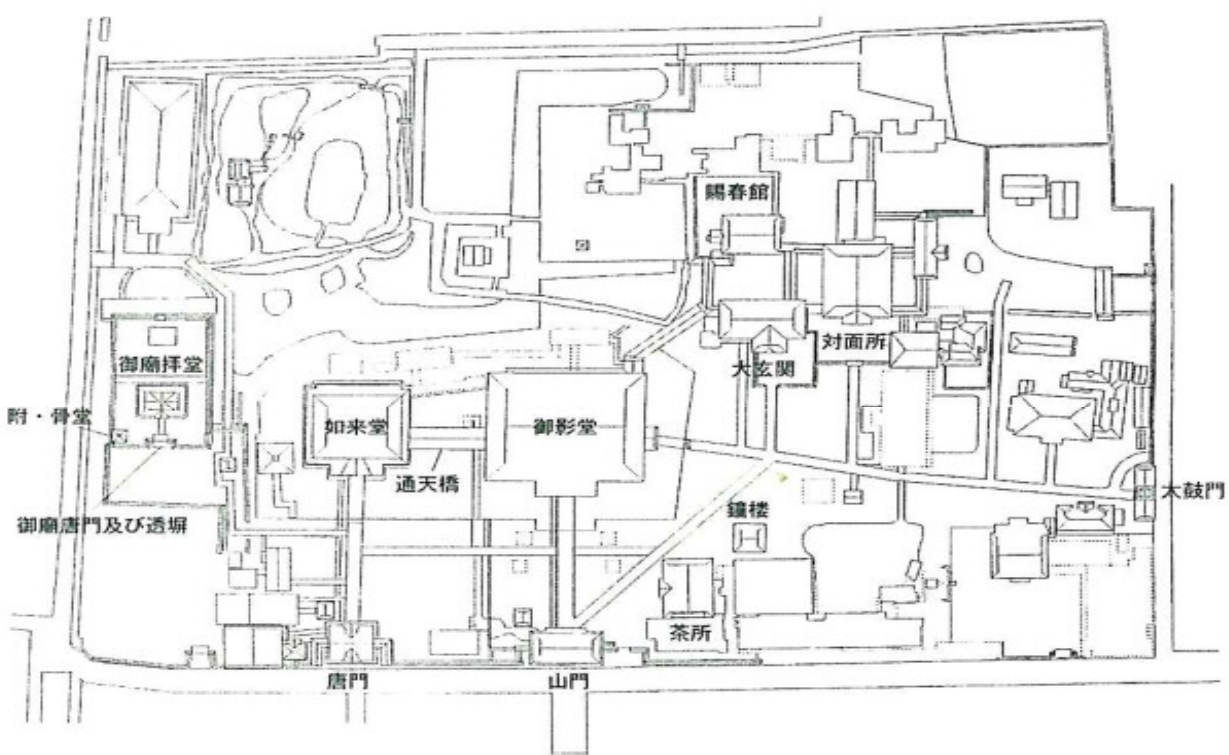
今回の調査では、おおむね17世紀代の遺物を含む整地層を確認することができました。整地層の下部は粘土層であり、もともと低湿地であったところを拡張するためのものと考えられます。この整地層が17世紀の広大な境内地になった時期に合致するものかどうかは、出土遺物を整理する中で検討する必要がありますが、専修寺の土地利用に関する貴重なデータを蓄積することができたと考えています。



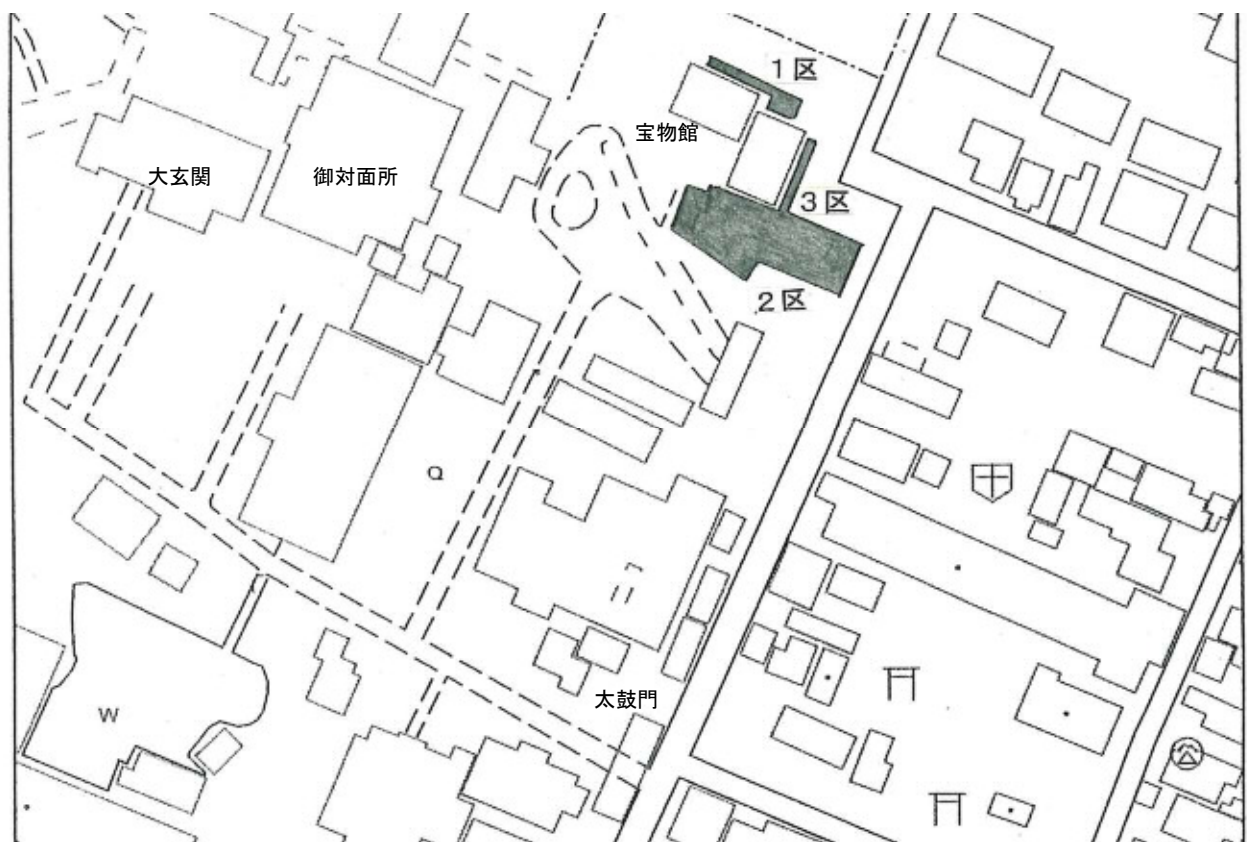
専修寺周辺地形図(国土地理院「白子・棕本」1 : 25, 000)



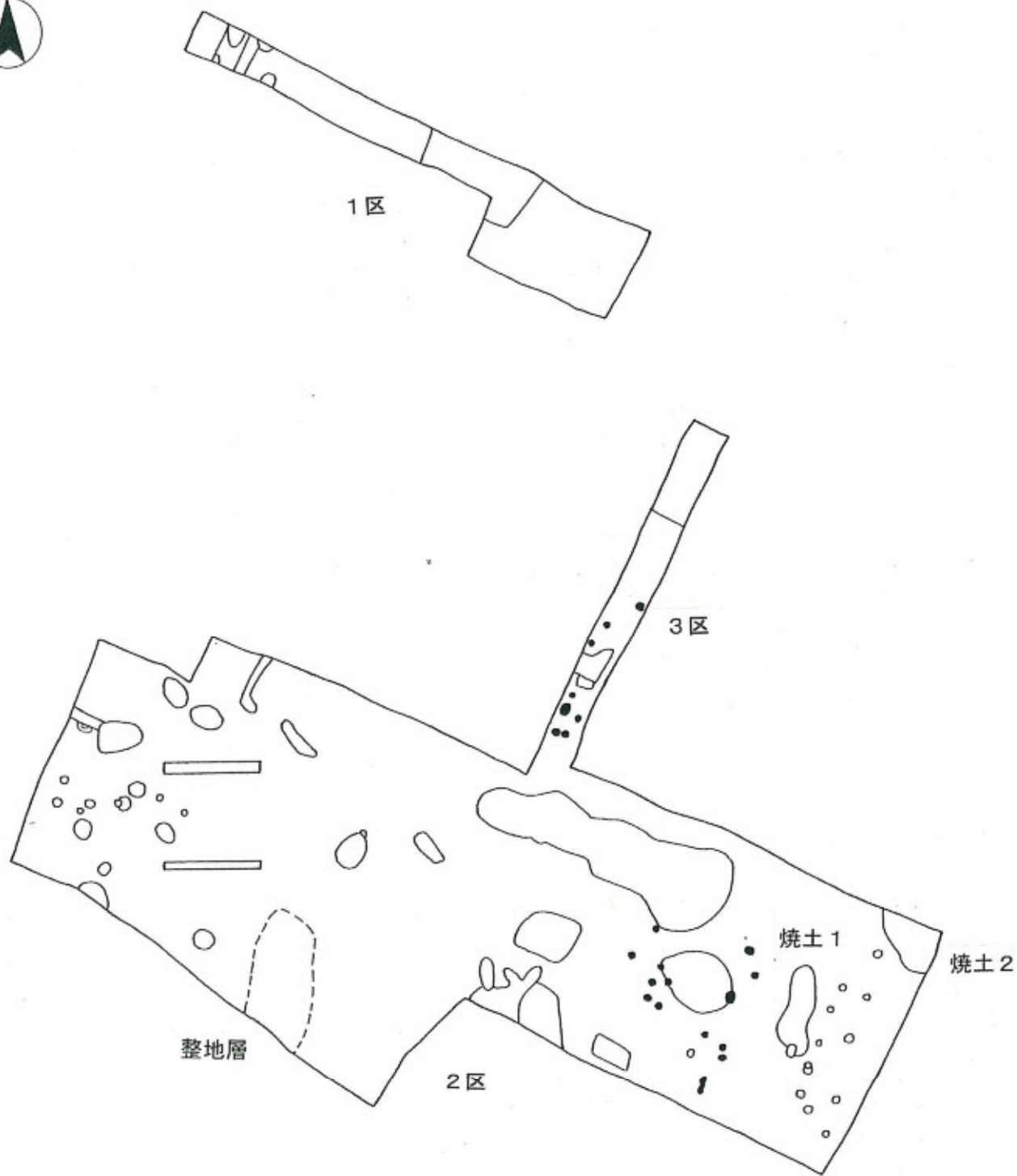
調査地位置図 (1 : 8, 000)



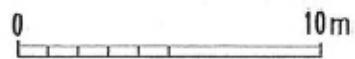
專修寺伽藍配置図

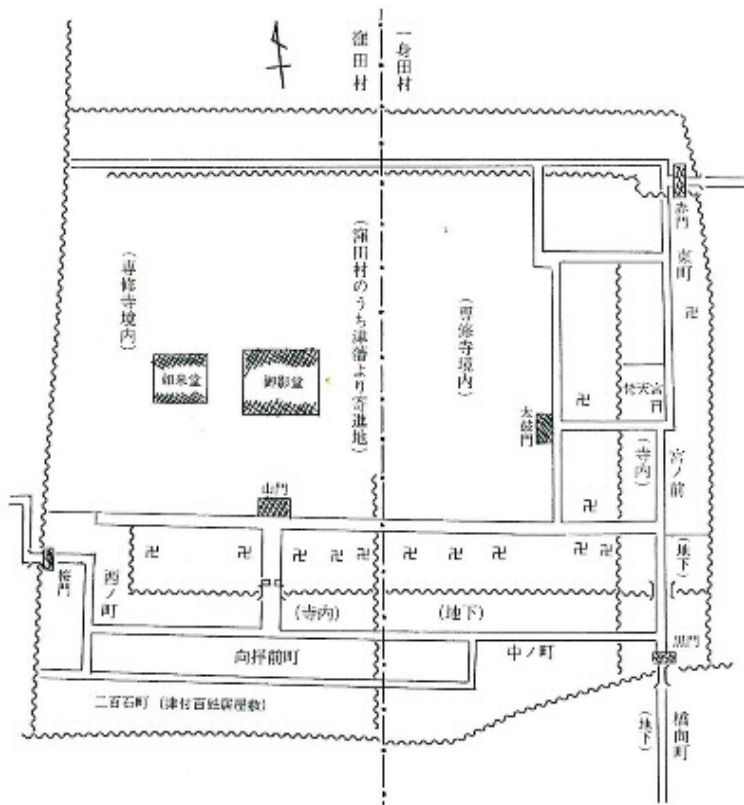


調査地位置図 (1 : 1, 500)



遺構略測図 (1 : 250)





一身田寺内町概念図



2区全景(西から)



2区 焼土1、焼土2(南から)



整地層出土軒丸瓦